

救命救急センターに搬送された 自殺企図者における自殺企図手段の選択に影響する 臨床的因子についての研究

本田 洋子¹⁾, 衛藤 暢明¹⁾, 河野 直子¹⁾,
松尾真裕子¹⁾, 喜多村泰輔²⁾, 石倉 宏恭²⁾,
西村 良二¹⁾

¹⁾ 福岡大学医学部精神医学教室

²⁾ 福岡大学医学部救命救急医学講座

要旨

背景:自殺企図手段の選択は、既遂か未遂かを分ける決定的な因子の一つであるため、どのような臨床的因子が手段選択に影響を及ぼすのかについて詳細に解明することは、自殺のプロセスを解明する上で大きな意義を持つ。そこでわれわれは、福岡大学病院救命救急センターに搬送された自殺企図者の年齢、性別、精神科的診断、自殺企図歴、自殺の意図、解離性、衝動性などの臨床的因子の自殺企図手段選択への影響を調査した。

目的:自殺企図者のどの臨床的因子が自殺企図手段の選択に影響を及ぼしているかを明らかにすることを目的とし、有意な関連を示す因子についてその背景を考察した。

対象と方法:平成18年4月～平成19年12月および平成21年11月～平成23年5月の計40ヶ月間に当救命救急センターに搬送された自殺企図者のうち、未遂者で研究参加の同意を得られた84人を対象とした。精神科医が面接により年齢、性別、自殺企図手段、自殺企図歴を調査し、自殺の意図については自殺意図測定尺度 (Suicide Intent Scale, SIS)、解離性については解離性体験スケール (Dissociative Experience Scale, J-DES)、衝動性については衝動性スケール (Barratt Impulsiveness Scale, BIS-11) を用いて評価した。自殺企図手段については、薬物・中毒による者を non-violent 群、それ以外の手段による者を violent 群に分類した。結果:男性は violent な手段を選択する傾向が見られた ($\chi^2=3.73$, $p=0.053$)。自殺企図歴と自殺企図手段の選択の間には関連が見られた ($\chi^2=17.2$, $p=0.0001$)。自殺企図歴のある群は non-violent な手段を選択した人が73.2%、自殺企図歴の無い群は violent な手段を選択した人が72.1%と多かった。また、解離性体験スケールの点数の高低において自殺企図手段の選択に差がある ($t=2.74$, $p=0.008$) ことが判明した。解離性が高い患者は non-violent な手段を選択することが明らかとなった。これらの因子以外の年齢、精神科的診断、自殺の意図、衝動性と自殺企図手段の選択の間には関連は見られなかった。

結論:福岡大学病院救命救急センターに搬送された自殺企図者を対象とし、自殺企図手段の選択に影響する臨床的因子についての調査を行った。性別、自殺企図歴、解離性と自殺企図手段の選択の間に関連が見られた。これらの臨床的因子を自殺予防対策に活用できるかをさらに検証する必要があると考えられた。

キーワード:自殺企図手段, violent, non-violent, 自殺の意図, 解離性, 衝動性